

バルバトスと怪獣娘の円谷学園冒険記

アインスト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはバルバトスと様々な怪獣娘が円谷学園などでドタバタハチャメチャ生活やほのぼのした日常です。

attention!

- ・キャラ崩壊注意。
- ・多分バトルもある。
- ・駄文、はてしなく駄文。
- ・投稿ペースは普通。

以上を踏まえて楽しんでいってください♪

目次

Act 1	始まり	1
Act 2	ゴモラの友達	5
special Act	作者からのお知らせ	9
Act 3	怪獣図鑑制作部	12
Act 4	居候	16
Act 5	何でも屋『鉄華団』	20
Act 6	ギャラルホルンの謎	26
Act 7	鉄華団の実態	29
Act 8	そういえばそうだった	33

Act 1 始まり

Act 1 始まり

??? side

? 「へえ……ここか」

俺は今ある学園の校門前に立っていた。
学園校門前にはこう書かれている。

『私立円谷学園』

? 「どうやって読んだ？これ」

すると俺の後ろから声が聞こえた。

??? side out

三人称 side

校門の前に一人の機体が佇んでいる所に二人の女の子がその機体に話しかけた。

「それは『つぶらや』だよ！」

「うん？」

「い、いきなり話しかけたらダメだよゴモラちゃん……」

「あ、ゴメンゴメン♪」

「…… あんた達は？」

ゴモラ 「あ、僕はゴモラ！」

ベムスター 「私はベムスターです」

ゴモラ 「お兄さんの名前は？」

「俺の名前は……」

三人称 side out

バルバトス「俺の名前は……バルバトス」
彼女らはどうやら『ゴモラ』と『ベムスター』というらしい。

当然、俺の第一発言は

バルバトス「女の子らしくない名前だね」

ゴモラ「えっ?」

ベムスター「そう……なのかな?」

バルバトス「あ、ゴメン、悪かった」

ゴモラ「ううん! 気にしてないよ!」

ベムスター「でもバルバトス君って意外と装甲がスカスカだね……」

バルバトス「そんなもんかな」

ゴモラ「じゃあバルバトス君の事、バル君って呼ぶね♪」

バル「は?」

ベムスター「ゴメン……ごもちゃん、あだ名で呼ぶの好きだから……」

バル「ふーん」

ゴモラ「えっ、まさかの無関心!」

すると突如、ベルが鳴る。

『キーンコーンカーンコーン……』

ベムスター「あ、ごもちゃん急ご!!」

ゴモラ「ひえええ! 三回連続遅刻はやダよお!」

バル「大変だね、あんたらも」

ゴモラ「あれ、バル君は?」

バル「悪い、俺は一度職員室に行かなきゃ」

ベムスター「という事は、バルバトス君が新しい転入生？」
バル「多分、そうなる」
ゴモラ「おおおお！じゃ、また後で！」
バル「うん、また後で」
そうして二人はバタバタと学校に入ってしまった。
もう少し余裕もって登校すればいいのに……。

二年教室にて

ゴモラ「ねえねえベムちゃん」
ベムスター「どうしたの？」

ゴモラ「バル君って何処のクラスになるんだろうね」
ベムスター「さあ？でもいい人だよね」
すると教室に女の子が一人、入ってきた。

？「おはようございます」

ゴモラ「あ、ゼットンちゃん！」

ゼットン「どうしたんです？嬉しそうですけど」

ベムスター「さっきバルバトスっていう人に会ったの。もしかしたら私達のクラスに来るかも知れないねって」

ゼットン「そうですか。ま、変なことしたら焼き尽くしますけど」

ゴモ・ベム（それはやり過ぎなんじゃ……）

少し三人で雑談した後、デスレム先生が入ってきた。

デスレム「よしお前ら、早く席につけ」

ゴモラ「あ、来ちゃったね」

ゼットン「ではまた後で」

ベムスター「そうだね」

どうやらデスレム先生は転入生を連れてきたらしい。

デスレム「お前ら喜べえ！初の男子だぞお！お、入ってこい
！」

『ガラガラッ』

ゴモラ「え……マジで？」

ベムスター「まさかゴモちゃんの勘が当たるとはね……」

二年教室に入ってきたのは……

バルバトス「名前はバルバトスという。よろしく」

怪獣娘一同「「「ええええええええ!?!?!?!」」」」

入ってきたのは朝に会ったバルバトスだった。

つづく!

Act 2 ゴモラの友達

前回のあらすじ

バルバトスが私立円谷学園にやって来た。

バルバトス「アバウトすぎないか？」

ゴモラ「そだね」

Act 2 ゴモラの友達

休み時間中、バルバトスは周りのクラスメイトから質問攻めにあっていたが、華麗にスルーしていた。

ピグモン「ねえねえ趣味は？」

バルバトス「特にない」

キリエ「スポーツに興味あるか？」

バルバトス「いや、ない」

ゴモラ「ないない尽くしだね……アハハ」

ベムスター「確かに……でも仕方ないのかな」

バルバトス「うん？」

ゴモラ「見た目優しそうだしね」

ベムスター「うん。確かに」

昼休み

バルバトス「……………」。(モグモグ)

ゴモラ「何食べてるんだろ？」

ベムスター「聞いてみればいいんじゃない？」

ゴモラ「そだね！おい、バルく〜ん！」

バルバトス「何？」

ゴモラ「一緒にご飯食べよ？」

バルバトス「別にいいけど」

ゴモラ「よし、そうと決まれば早速屋上にGO！」

ベムスター「アハハ……………」

バルバトス「……………」。

屋上

？「あ、ゴモちゃん！」

ゴモラ「あ、モゲちゃん！」

どうやら屋上には先客がいたようだった。

バルバトス「……………誰？」

ゴモラ「あ、紹介するね♪友達のもゲドンちゃん！」

もゲドン「どうも♪あなたの名前は？」

バルバトス「バルバトスだ」

ゴモラ「バル君って呼んであげて！」

バルバトス「あ？」

ゴモラ「すみませんなんでもないです」ガタガタ
ベムスター「これは怒らせちゃいけないタイプだ…」

モゲドン「アハハ！でも優しそうだね♪」

バルバトス「…………… そうでもない」

バルバトスは一瞬顔を曇らせる。

ベムスター（昔に何かあったのかな……………？）

ゴモラ「じゃ、早くご飯食べよ！」

モゲドン「そうだね♪」

バルバトス「……………」。

ゴモラ「そう言えばバル君って何食べてるの？」

バルバトス「火星ヤシ」

ゴモラ「なにそれ？」

バルバトス「食べてみるか？」

ゴモラ「うん！いる！」

ベムスター「じゃあ私も」

モゲドン「私も食べてみたい！」

バルバトスは三人にそれぞれ二個ずつ火星ヤシを渡した。

バルバトス「一応言っとくけど」

ゴモラ「なに？」

バルバトス「たまにハズレ入ってるから」

ベムスター「そうなの？」

バルバトス「うん」

モゲドン「あ、美味しい！」

ベムスター「ホントだ！」

しかし。

ゴモラ「……………っ!？」

ゴモラだけが悶絶する。

ベムスター「ど、どうしたのゴモチちゃん？」

バルバトス（あ、これはハズレ引いたっばいな）

ゴモラ「な、なにこれ想像以上に不味いんだけど…」
バルバトス「ハズレだな」

ゴモラ「うそくん…」

ベム・モゲ（ハズレを引かなくて良かった…）

バルバトス「ほら、口直しにもう一個」

ゴモラ「うく…」

バルバトス「大丈夫だよたまにだし」

ゴモラ「じゃあいただきます… あ、美味しい！」

バルバトス「だろ？」

ゴモラ「そう言えばベムちゃん、今日って部活有ったっけ？」

ベムスター「そりやあるに決まってるよ」

ゴモラ「だよね〜♪あ、そうだバル君！」

バルバトス「うん？」モグモグ

ゴモラ「今日の放課後、うちの部活おいでよ！」

つづく！

Special Act 作者からのお知らせ

Special Act 作者からのお知らせ

作者「はいどうも作者でございます。今日はね、三作品の方々に集まってもらったのには理由があります」

まずは自己紹介。

『ある男と胴付きまりさの話』主人公、不知火零士君と胴付きまりさちゃん。

零士「お久しぶりです。今回はこの場をお借りして出演させていただいてます」

まりさ「ヤッホー！久しぶり♪まりさだよ！」

続きまして『艦隊これくしょん』新しい提督は研究員だけどソルジャー!?の主人公、氷室ツルギ君と電ちゃんです。

ツルギ「約3週間ぶりか……後でドタマぶち抜いてやる」

電「落ちついて下さい提督！どうもお久しぶりです電なのです！皆さん覚えてますか!？」

そして最後に『バルバトスと怪獣娘の円谷学園冒険記』の主人公、バルバトス君とゴモラちゃん。

バルバトス「どうも」

ゴモラ「うわあ、かわいい人いる〜♪」

零士「で、何で俺達を呼んだ？理由は？」

作者「えくとねえ……」

作者以外「」「」「ゴクリ……」「」「」

作者「しばらく『ある男と胴付きまりさの話』と『艦隊これくしょん』新しい提督は研究員だけどソルジャー!?!?』の更新を凍結させてください」

零士「ツルギ「はあ?。」」

作者「だつてねえ、ネタが切れかけてまして…。そこでしばらく2つの更新を凍結させて1つの作品に集中しようかなあ、なくんて」バルバトス「俺達の方は?」

ゴモラ「うんうん」

作者「それなら問題ナツシング!ちゃんとありますよ」

まりさ「じゃあ結論からして、私達の作品を凍結する代わりに、バルバトス君達の作品を更新するって事かな?」

作者「そゆこと。すいませんねえ、こんな根性なしで」

電「誰もそんな事言つてないと思うのです…」

ツルギ「で、理由は?」

作者「あのねえ、最近僕ちゃんも忙しいのよ!テストとか仲間内で全道大会出るやついるからその練習の付き合いだつてあるしさあ!」

零士「ま、御愁傷様だな」

まりさ「が、がんばつて〜」

ツルギ「やるからにはキチンとやれよ?でないと…」チャキツ

作者「わああああ?!?わかつたわかりました!!だからその刀降ろして!!?」

零士「確かになあ、でないと俺もお前の眉間撃ち抜いちまいそうだぜ」ジャキツ

作者「か、勘弁して下さい…」

バルバトス「ま、頑張つてよ作者さん」

ゴモラ「フアイトお〜」

作者「ありがとねえ!僕ちゃんががんばる『キモい(零士)』(・ω・)

、(ショボーン

作者「まあ、という訳で身勝手ではありますがご理解いただけると嬉しいです。これからは1つだけしか更新しませんがいつか必ず凍結解除します！それでは皆さん、これからも『バルバトスと怪獣娘の円谷学園冒険記』をよろしくお願いします！·ではでは！」

Act 3 怪獣図鑑制作部

前回のあらすじ。

ゴモラから部活に誘われる。

バルバトス「やっぱリアバウトだな」

ゴモラ「それ言っちゃダメだと思う」

Act 3 怪獣図鑑制作部

放課後

ゴモラ「じゃあ早速部室に行こう！」

ベムスター「あれ？ゴモちゃん追試じゃなかった？」

ゴモラ「あ……」

バルバトス「場所さえ教えてくれれば自分で行けるよ。教えてくれ」

ゴモラ「うんわかった！」

く説明中く

ゴモラ「わかった？」

バルバトス「大体はな」

ゴモラ「なら大丈夫だね♪じゃ、また後で！」

バルバトス「追試、頑張れよ」

ゴモラ「ありがとう！じゃあ行ってくる！」

ベムスター「私も行ってくるよ。ゴモちゃん一人じゃ心配だから」

バルバトス「わかった」

ベムスター「一応……気を付けてね」

バルバトス「？ああ、わかった」

こうしてバルバトスは部室に、ゴモラは追試のため教室に。
とうか追試にならないようにしろよ……。

部室前

バルバトス「ここか」

バルバトスはドアを開け、中に入る。

バルバトス「まだ誰もいないみたいだな……」

辺りを見回しても誰もいない。

バルバトス「少し休むか…… アイツ、追試大丈夫かな……」

1時間後。

バルバトス「ん、少し寝過ぎたか？」

すると扉の前で話し声が聞こえる。

？「新しい部員はいるかねえ？」

？「だからと言って強制的に入部させちやダメですよ？」

？「わかってるわかってる。大丈夫だっ♪」

バルバトス「数からして四人か……仕方ない」

次元転送を行い、太刀を取り出すバルバトス。

バルバトス「……………」。

『ガラガラッ』

？「お？」

バルバトス「!!」

？「あれ、彼は確かか……」

バルバトス（また質問攻めか……）ポリポリ

太刀をしまい、頭をかくバルバトス。

バルバトス「あんたら誰？」

ゼットン星人「ああ、私はゼットン星人。ゼットンの姉だ！よろし

く転入生♪」

ペガツサ星人「あ、私はペガツサ星人です……よろしくお願いしま
す」

バルバトス「あ、どうも」

ゼットン星人（以下ゼ星）「ところでお前……」

バルバトス「うん？」

ゼ星「新しい入部希望者か!？」

バルバトス「は？」

ペガツサ「あの、ゼットン星人さん？困ってますよ彼」

ゼ星「そうか？私にはそうは見えないが？」

？「確かに。どうか待ってたみたいだよ？」

バルバトス「あんたは？」

ガッツ星人「ああ、私はガッツ星人！よろしく!」

バルバトス「ああ、よろしく。で、アイツは？」

バードン「あ、私はバードン」

バルバトス「ふーん」

ゼ星「ところでお前の名前は？」

バルバトス「俺の名前はバルバトス」

ゼ星「そつか。で、この部活気になったのか？」ワクワク

バルバトス「まあね。友達に勧められたし」

ゼ星「そうかそうか！じゃあ早速この紙にサインを……」

ペガツサ「あの、ホントに入ってくれるんですか？」

バルバトス「いいよ、暇だし」

ゼ星「いよつしやああああ!!」

バルバトス（うるせえ……）

ゼ星「じゃあこれからよろしくな、バルバトス！」

バルバトス「わかった」

つづく！

Act 4 居候

前回のあらすじ。

バルバトス君怪獣図鑑制作部入部。

バルバトス「だからアバウト（ry）」

ベムスター「気にしちや負けだと思う……」

Act 4 居候

ゼ星「よしよし！今日の部活終わり！」

ペガツサ「鍵は私がかけてきますね」

どうやらペガツサは機材の片付けをするために脚立に登っていた。
すると。

『バキンッ』

バルバトス（今のは…… 金具が折れた音？）

なんと脚立の金具が壊れ、ペガツサはバランスを崩す。

ペガツサ「キヤッ!!」

バルバトス「!!」バツ！

『ドサッ』

ペガツサ「う、うくん？あれ？」

間一髪、バルバトスが救出。

バルバトス「大丈夫？」

ペガツサ「あ、はい大丈夫…… ひやつ！」

バルバトス「どうかした？」
ペガツサ「あ、あのっ！えっと…：／／／／」カァー
さて、何故ペガツサが照れているか。それは…：

ゼ星「おお、お姫様だっこじゃん♪」
バルバトス「？」

ペガツサ「はうくく…：／／／／」

数分後。

バルバトス「大丈夫？怪我はないか？」

ペガツサ「は、はいく／／／／」

バルバトス「ならいいや、あんたが怪我したら俺、どうしたらいい
か分からないから」

ゼ星「ところでバルバトス、お前家は？」

バルバトス「野宿だけど」

ゼ星「なぬっ!？」

バルバトス「なんか変か？」

ゼ星「あ、じゃあもしお前が良かったら家来るか？」

バルバトス「いいのか？」

ゼ星「多分大丈夫！」

バルバトス「ホントか？」

ゼ星「ああ。多分大丈夫だから！」

バルバトス（不安だ）

ゼットン星人の自宅にて

ゼ星「たっだいま〜！」

バルバトス「お邪魔します」

ゼットン「……。」

ゼ星「どつたの？」

ゼットン「二人ほどお帰りください」

ゼ星「なんでさあ〜？」

ゼットン「姉さんはまだいいとして彼は何故ここに？」

ゼ星「だってアイツ住む場所ないって言ってたからさ〜」

ゼットン「それでも姉さんの意思だけで決めるわけにはいきません

！そもそもこうなるなら何故私に連絡しなかったんですか!？」

ゼ星「いや〜、後で連絡すればいいかな〜なんて」

ゼットン「はあ〜、まったく……。」

ゼ星「許してヒヤシンス♪」

ゼットン「絶対に許しません。今日の晩御飯のおかず抜きですからね」

ゼ星「そんな殺生な……。」

バルバトス「やっぱり野宿しよう……。」

ゼ星「いやいやいやいや!? 待って待って!!」

バルバトス「なんで？」

ゼ星「いや寝床とか必要じゃん? だから家で居候しなよ♪」

ゼットン「まあ仕方ないですね。その代わりに家事はしっかりやってもらいますからね？」

バルバトス「わかった、任せてくれ」

つづく！

Act 5 何でも屋『鉄華団』

前回のあらすじ。

バルバトス君、ゼットン星人のお宅にて居候になる。

バルバトス「やっぱり（ry）」

ゼットン「メタいですよ」

Act 5 何でも屋『鉄華団』

放課後

ゴモラ「はあく、やつと授業終わった〜！」

バルバトス「そんなにめんどくさいのか？」

ベムスター「とりあえず部活行こっか」

ゴモラ「オツケー！じゃ、バル君も行こ？」

バルバトス「悪い、今日は行かなきゃならない用事があるから」

ベムスター「用事って？」

バルバトス「詳しくは言えない。それじゃ」

ゴモラ「あ……行っちゃった」

ベムスター「用事って何だろうね」

仕方ないので二人だけで部室に向かうことに。

怪獣図鑑制作部部室

ゴモラ「て事があつて……」

ゼ星「うゝむ、何でだろうなあ？」

ガッツ「コンビニでバイトとか？」

ゴモラ「うゝん……」

回想。

バルバトス「いらっしやいませ」

回想終了。

ベムスター「ぶふっ」

ガッツ「プププ……」

ゴモラ「アツハツハハハ！それはないよ〜！」

ペガツサ「じ、じゃあバーでバイトとか……？」

ゼ星「うゝむ……」

回想。

バルバトス「本日指名されたバルバトスです」

回想終了。

ゼ星・ベム・ゴモ・ガッツ「「それはない」」

ペガツサ「そうですか……」

ガッツ「というかそれってペガちゃん理想じゃない？」

ペガツサ「ち、違いますよお!!？」

ゼ星「よし決めた」

ゴモラ「何を？」

ゼ星「バルバトスを尾行しよう！」

ベムスター「何ですか？」

ゼ星「だってバルバトスが何してるか気になるじゃん？」

ゴモラ「確かに！」

ガッツ「バルバトスが何してるか暴いてやろうじゃん！」

ベムスター「(いいのかなあ……?)」

ペガツサ「で、では行きましょう！」

怪獣図鑑制作部一同「「お〜!!」」

大通り

バルバトス「……………」スタスタ

ゼ星「行つたな」

ペガツサ「よし追いかけてみましょう！」

ゴモラ「オツケー」

ベムスター（なんか罪悪感を感じるなあ……）

ゴモラ「あっ！」

ゼ星「どした？」

ゴモラ「バルバトス君、建物の中に入ってた！」

ゼ星「よし追跡！」

少し走って。

ゼ星「ここで間違いないな？」

ゴモラ「うん！ってあれ？」

ベムスター「どうしたの？」

ゴモラ「なんか書いてある！」

ガツツ「えくとなにになに？ 《様々な仕事承ります「何でも屋『鉄華

団』》？」

ゴモラ「なにそれ？何でも屋って？」

？「読んで字のごとく『何でも仕事をこなす組織』だぜ？」

怪獣図鑑制作部一同

「「「うわあああ!!」」」

? 「あ、ワリイ驚かしちまったか?」

ゴモラ「だ、誰!」

流星号「俺様は『流星号』。ま、流星って呼んでくれや」

ベムスター「あの、ここってどんな仕事を受けているんですか?」

流星号「あー、ほとんどが『ギャラルホルン』退治だな」

ゴモラ・ペガツサ「ギャラルホルン?」

流星号「ギャラルホルンについては後で教えてやるよ。で?お嬢さん達、ここに何しに来たんだ?」

ゴモラ「あ、あの!バルバトス君見ませんでしたか?」

ベム・ガッツ「ドストレートに聞いたよこの子!!」

流星号「バルバトス?ああ!アイツな?」

ペガツサ「ご存知なんですか?」

流星号「知ってるものにも、アイツ、俺達の仲間だぜ?」

ゼ星「なぬっ!」

バルバトス「流星どうしたの... って」

ゴモラ「や、ヤッホー...」

ベムスター「ごめん...」

ガッツ「来ちやった♪」

ペガツサ「ど、どうも...」

ゼ星「ひどいぞバルバトス!私に黙って仕事なんて!」

バルバトス「... ..はあく、まあいいや上がりなよ」

ゴモラ「いいの?」

バルバトス「ああ。説明したい事が山ほどあるからな」

ゴモラ「説明したい事?」

ベムスター（もしかしてギャラルホルン?）

うんうん！

Act 6 ギャラルホルンの謎

前回のあらすじ。

ゴモラ達がバルバトスを追跡すると鉄華団に辿り着く。

ベムスター「あつ、ちよつと詳しくなつた」

バルバトス「ホントだ」

Act 6 ギャラルホルンの謎

流星「そーいやお嬢さん達の名前、聞いてなかつたな。何て言うんだ？」

ゴモラ「僕はゴモラ！」

ベムスター「私はベムスターです」

ゼ星「ゼットン星人だ！」

ガッツ「私はガッツ星人だよ」

ペガツサ「わ、私はペガツサ星人です！」

流星「へえ、どの娘もかわいいなあ〜！」

バルバトス「しかもゴモラとベムスターは俺と同じクラス」

流星「お、いいねえ♪だがよバルバトス、いずれ誰かを選ばなきゃなんねえからな？」

バルバトス「何が？」

流星「そこからかよっ！」

ベムスター「ま、鈍いのがバルバトスのステータスみたいな物だか

らなあ)

ゴモラ「そういえばさ、今僕たち何処に向かっているの？」

バルバトス「今は『鉄華団』の紹介だよ」

流星「ま、そういうこった！お、おーいリベイク！」

トレーニングルーム

流星「おーい、リベイク！」

？「どうしたあ？今懸垂で忙しいんだが？」

ゴモラ「うえっ！腕一本で懸垂してる！」

ベムスター「ロボットで言うところのジェネレーター出力が凄いなだよきつと」

？「おお、バルと流星か。でそこの奴等は？」

バルバトス「俺の友達」

ゴモラ「えくと、あの、誰？」

リベイク「ああ、俺はグシオンリベイク。リベイクと呼んでくれ」

バルバトス「ねえリベイク、改見なかった？」

ペガツサ「改？」

流星「ウチのリーダーだよ、グレイズ改ってんだ」

リベイク「改なら多分執務室にいるんじゃないか？」

バルバトス「わかった、ありがとう」

リベイク「おうよ」

ゴモラ「ベムちゃん、この人達いい人ばかりだね♪」

ベムスター「うん。あ、そういえばギャラルホルンって？」

バルバトス「知らないの？」

ガッツ「あ、私知ってるよ♪」

ゴモラ「それってどんなの？」

ガッツ「ギャラルホルンっていうのはね、最近出来た政府管轄の組織だよ。ただ、そのギャラルホルン内でヤバい実験してるかもしれないって噂だよ」

ベムスター「あ、そういえば公民の授業で習ったね」

ゴモラ「え？そうなの？」

ベムスター「先生の話ちゃんと聞こうよ……」

ゴモラ「アハハ♪」

ゼ星「で？そのギャラルホルンがどうかしたのか？」

？「それについては俺が話してやる」

ゴモラ「わっ！」

バルバトス「あ、改。それにグシオンまで」

改「ようお前ら。俺がこの『鉄華団』の団長、グレイズ改だ。よろしくな」

グシオン「僕はグシオン。主に会計の仕事をしてるよ」

ゴモラ「グシちゃんってなんか太いね」

グシオン「違うって！これは重装甲だから太く見えるんだって！」

流星「っていうかグシちゃんって……クククww」

グシオン「わ、笑うなよ!!」

ペガッサ「ところでギャラルホルンについてもっと教えてくれないでしょうか？」

改「ああ、わかった。んじゃこっち来い」

つづく！ (中途半端でごめんなさい m ((m (

Act 7 鉄華団の実態

前回のあらすじ。

グレイズ改とグシオンが登場。

ペガッサ「また戻っちゃいましたね……」

バルバトス「ま、仕方ないよ。この作者さん『馬鹿』だから」

作者「(´・ω・｀)」シヨボーン

Act 7 鉄華団の実態

改「じゃ、ギャラルホルンについて話始めm『おい改!』なんだよ
またアイツかよ……」

ゴモラ「アイツ?」

改「ああ、この警察官の『Ez-8』だよ。別名8ちゃん」

Ez-8「8ちゃん言うな!」

改「何の用だ? 8ちゃん」

ゴモラ「8ちゃんって……ププツ」

Ez-8「あれ、改、彼女らは?」

改「それはアイツらに聞けや」

E z―8「はあく… お前なあゝ、まあいいや僕は警察官のE z―8。よろしく。君らは？」

ゴモラ「僕はゴモラ！」

ベムスター「私はベムスターです」

ゼ星「ゼットン星人だ！よろしく！」

ガッツ「ガッツ星人だよ」

ペガツサ「ペガツサ星人つています！」

バルバトス「ところでE z―8さん、何しに来たの？」

E z―8「お前だけが普通に呼んでくれて嬉しいよ…」

ゴモラ「で、結局ギャラルホルンつて何？」

改「ぶっちゃけるとかなりヤバい組織だ」

ベムスター「ど、どのくらい？」

改「平気な顔して戦争するぐらいだ」

バルバトス「で、その中でも一番強いのが『キマリス兄弟』だよ」

ゼ星「キマリス兄弟？」

バルバトス「兄のキマリスと弟のトルーパーさ」

リベイク「どちらも機動力が高く、接近して攻撃する必要がある」
ゴモラ「そんなに速いんだ…」

E Z—8 「さて改、お前またやらかしただろ？」

改 「何をだ？」

E Z—8 「隣街のグループに喧嘩吹っ掛けたんだろぅがあ!!」

改 「あー、悪かった悪かった。すいませんでしたー、これでいいだろ？」

E Z—8 「お前なあ……」

グシオン 「おーい改、依頼が…… って改何したの？」

執務室

改 「で？コイツが依頼人か」

▽ 「どうもはじめまして、ターンエーです。今日はあなた方鉄華団に依頼のため来ました」

バルバトス 「その依頼は？」

▽ 「ギャラルホルンの撃退です。報酬額は先ほどお渡しした書類に記載してあります」

改 「どこに行きやいい？」

▽ 「実は…… 彼女らの学校です」

ゴモラ「え……？」

▽「僕らによる独自調査に引つかかる点は何点かあったんです」
ベムスター「それって？」

▽「何故、と言いますとこれを見てくれればわかると思います」
そう言つてターンエーは一枚の書類を渡した。

ガッツ「なあにこれえ？」

ペガツサ「彼らは……？」

改「奴等はギャラルホルンの兵隊、『グレイズ』だ」

ゴモラ「あれ？でも改もグレイズじゃない？」

改「俺の過去は後で話してやる。おいバル！」

バルバトス「わかつてる。やればいいんでしょ？」

改「頼むぞ」

ゴモラ「ねえ！」

バルバトス「うん？」

ゴモラ「僕たちもついていっていい？」

バルバトス「は？」

つづく！

Act 8 そういえばそうだった

前回のあらすじ。

ゴモラがバルバトスについて聞いていいか、と聞く。

バルバトス「やっぱりこれが標準か……」

ガッツ「ま、しゃーないね」

Act 8 そういえばそうだった

バルバトス「ついていく事には多分問題ないと思うな」

ゴモラ「ほ、ホントに？」

バルバトス「うん、でも決行日が決まっているから」

改「決行日は何時だ、ターンエー」

▽「そうですね……一週間後でお願いします」

改「わかった、バル聞いたか？」

バルバトス「大丈夫」

ベムスター「じゃあ作戦が始まるまで私たちはいつも通りにすればいいのかな」

改「それで構わねえ。バル、一週間後だ。わかったな？」
バルバトス「オツケー、で？殺せばいいんでしょ？」

改「ああ」

▽「では鉄華団の皆さん、また後日」

改「終わり次第こつちからまた連絡する」

▽「わかりました。ではまた」

円谷学園

怪獣凶鑑制作部部室前

ゴモラ「いや、ホント驚きだよ！」

ベムスター「確かに。まさかバル君が仕事していたなんてね」

ペガツサ「いつから仕事していたんですか？」

バルバトス「ここに来る前から」

ゼ星「おいおい、私たち怪獣凶鑑制作部の活動忘れてないか？」

ペガツサ「そうでしたね。ではバルバトス君、一度説明したいので部室に入っていましたか？」

バルバトス「わかった」

部室内

バルバトス「で？具体的に何すんの？」

ペガツサ「私たち怪獣図鑑制作部は簡単に言ってしまうえばアルバム制作です！」

バルバトス「アルバム？」

ペガツサ「はい！まずこのアルバムを見てくださいい♪」

バルバトス「ふーん、詳しく書かれているんだね。というかどうやってこれ作るの？」

ペガツサ「実は怪獣娘のスペックを調べるんです。ただ、簡単には教えてくれません」

バルバトス「要は本人に聞けってことか」

ペガツサ「そうですね。では早速行きましょう！」

ゴモラ「今回は誰のスペック調べるの？」

ペガツサ「えつと、今回は『キングジョー』さん、『ビルガモ』さん、それから『メカギラス』さんです」

ゼ星「おわあく、こりや大変だなあ……」

バルバトス「なんで？」

ガッツ「この三人はね、唯一の堅物怪獣娘なんだ。しかも三人揃ってるなんて滅多にないからね」

バルバトス「ふーん、じゃ、そいつらの所に行けばいいんでしょ？」

ペガツサ「今回は私とガッツ星人が同行します！」

ガッツ「ま、よろしく」

バルバトス「わかった」

通学路

キングジョー「今日は久しぶりに皆で何か食べに行こう？」

ビルガモ「あ、いいねそれ！」

メカギラス「……………賛成」

バルバトス「アイツらか？」
ペガツサ「はい。珍しいですね、三人が揃ってるなんて」
ガツツ「ま、今がチャンスって訳ね」
バルバトス「じゃあ俺が行ってくるよ」
ペガツサ「え!?!ちよつ!?!」

ビルガモ「で、何処にする？」
キングジョー「うゝん、じゃあ『おい』ん？」
バルバトス「ちよつといいか？」
メカギラス「……………誰？」

バルバトス「ああ、怪獣図鑑制作部の者なんだが」
キングジョー「？」
バルバトス「いきなりで悪いがお前らのスペックを教えてくださいな
か？」

キン・ビル・メカ「!?!」
バルバトス「どうした？」
キングジョー「……………キ」
バルバトス「キ？」
キングジョー「キアアアアア!!／／／／」
『ゴシヤアツ!!』(まさかの正拳突き!?)
バルバトス「ガハツ!?!」

しばらく経って。

バルバトス「う、うん？」

ペガツサ「あ、やっと起きました？」

バルバトス「えっと、確か俺はアイツらにスペックについて教えてもらおうとして聞いたらいきなり意識が……」

ガツツ「あ、そういえば言っただけだね」

バルバトス「な、何を？」

ペガツサ「いいですか？必ずしもスペックを覚えてくれるとは限りません。何故なら簡単に言っただけじゃあ『裸になってくれ』と言っただけで同じ事なんです」

バルバトス「そ、そうか、だから赤面して……」

ガツツ「というか大丈夫？おもいつきり正拳突き食らってたけど」

バルバトス「ああ、いまだに腹が痛い……」

ペガツサ「今回は根気よくやっていくしかないですね」

バルバトス「く、くそお、簡単かと思っただ……」

つづく！